

# 平城京研究の先覚者 北浦定政に関する基礎的研究

埋蔵文化財センター

平城京の研究に先駆的役割を果たした北浦定政(1817~1871)関係史料の調査も2年を経過し、そのうち曾孫の北浦直人氏所蔵史料の写真撮影コマ数は、2,013コマに達している。その釈読はまだ半ばを過ぎたばかりであるが、従来、通説として語られていることと若干異なる点や新事実の判明があったので、ここに報告したい。

(1)定政が農民の子として現在の奈良市古市町に生まれた、と記されることが多いが、実は伊勢・安濃津藤堂藩の城和奉行所(在、古市)の掛け屋の子として生まれたのである。掛け屋とは、藩への上納米を管理し、適時にそれを売却し、その金を預かり、支出を担当する業で、相当の才識を要するのであり、定政は比較的恵まれた家庭環境のもとで育ったと考えられる。

(2)16歳の時、父を失い、その直後に同奉行所銀札会所手代となる。そして近江の富田泰州や伊丹の中村良臣らに和歌を、香川景樹や本居内遠(宣長の孫)らに国学を、伊勢の齋藤拙堂に漢学を学ぶとされているが、これらは公務遂行の傍、主に書簡のやり取りによったと推定できる。

(3)山陵の比定研究を志す動機は、折からの尊皇攘夷の思潮の影響があったと思われるが、直接的に誰かの影響を受けたとは考えられず、蒲生君平の『山陵志』に自己の見解と異なるものを見いだしたことによろう。その研究成果が嘉永元年(1848)の『打墨縄』1巻である。一方、条坊・条里の研究は、奈良町奉行所与力中条良蔵の奨めによるところが大きいことは、定政自身の『平城宮大内裏跡坪割之図』(嘉永5年)の自序に記す。この図の作成に重用した西大寺蔵の古絵図や「三宝料田畠目録」の閲覧にも良蔵の仲介があったことは確実である。

(4)文久2年(1862)の幕府の山陵調査に尽力し、翌年には藩主藤堂高猷より、特に藩士に列せられ、御陵御用掛に任じられた。その後、神武陵地の諮問、志貴・光仁・早良3陵の修復、内大臣近衛忠房の大和諸陵巡拜の案内などに功があり、藩主・山陵奉行(戸田忠至)・公卿(近衛忠房・大原重徳)らからの賞賜相次ぎ、慶応2年(1866)には、藩主から御陵御用掛に加えて山城大和領地出納監司兼郷里監察役を命じられている。

(5)その交友関係は意外に広く、現在明かになっている者でも、奈良はもとより京・大阪・伊勢の国学者・歌人・勤皇志士ら約60人に及び、その中には荒川重郷・伴林光平・橋本藤一・岡田亀久郎・井上石見・蓮月尼・谷森種松(善臣)・津久井清影(平塚瓢斎)・松本棋太郎・万年長左衛門(亀雄)・入交太郎右衛門(省齋)・川喜多久大夫(政明)・川村尚迪・菅長好などの名がある。これによって幕末の文化史的側面はもとより、政治史的な一面をも明らかにし得る。

(6)定政の業績の主流をなす平城京図・大和国条里図の作図技法における特徴点は、方位がいずれも北を上採ること、測距には測量車と歩測を用いたこと、坪界交点に○、条里界に△のほか、大鳥居・神社・市街地入口・木戸・橋などに記号を用いていること、主題の認識が明確で、主題に無関係の事項は省略されていること、などである。(岩本次郎・木全敬蔵)